

(1) 教育実習から学んだこと 〈4〉

自分らしい授業展開について (高校 公民)

文学部 4年 H.M

◇課題となった「自分らしい」授業展開

今回の教育実習では、ホームルームでは高校2年生の文系アドバンスクラスを、授業では高校2年生の倫理と高校3年生の政治経済を担当させてもらった。

私は、1年次から大学の教職課程で学んできた教職入門などの理論や授業実践例の研究、模擬授業などの経験をもとに、「生徒にはこのような仕方では接してみよう」「このような授業を展開してみたい」という思いや理想像といったものを構築してきた。しかし、いざ現場に立ってみると、目の前のことに追われてしまい、授業を構想・展開させることの大変さや知識の乏しさを痛感させられた。自分らしく実習ができたという実感もあった反面、(悪い意味で)あるワクのなかでなんとか無難にやり切った、という気がしてならない。

授業のなかでも社会科、とりわけ今回担当した公民科は、切り口が多様であるため授業を行う人によって同じ内容でも全く異なるカラーを見せる。それゆえ綿密な教材の準備や生徒の意欲を喚起させるための授業展開、そして自分の「授業軸」を持つことの大切さを実感させられた。そこで、反省を踏まえながら高校公民科における「(自分らしい)授業展開」のあり方について、改めて考えたい。

諸先生方の授業を見学させていただくと、多くの授業が「導入・まとめ各5分、展開①・②各15～20分」という枠組みで構成されていることがわかり、この通りに進むと生徒の集中や先生自身のカリキュラム構成に効果的であるとも感じた。特に社会科の先生方は知

識量が豊富で、教科書や資料集に載っていないようなかなり専門的な内容をわかりやすく説明したり、生徒を惹きつけるためにテレビや映画の話と関連づけて授業を展開するなど、引き出しの多さを素晴らしいと感じた。実習校がわりと進学校で(授業を真剣に聞いてくれる生徒が多い)期末考査も数週間後に迫っているという前提に私はとらわれてしまい、授業の型を今まで担当した指導教諭と同じようにしようと思い、通常使用するプリントの大まかな枠を指導教諭と統一した(B4用紙で、左側は説明事項や用語の穴埋め、右側はメモ欄や補足事項を書くためのスペースとした)。実際に授業を行うと、はじめの数はバランスよくいったと感じたものの、何回かすると片面だけで授業内容をまとめると限界が生じ、特に政治経済では補足事項が多く、右側に記入する内容と左側にある内容とのバランスが悪くなってしまったり、予定していた時間通りに上手くまとめられなくなってしまうことが出てきた。

ここで感じたことは、「授業のワクというものはない(そのため指導教官からは授業計画や内容に関して何も限定・制限されなかった)」「そのためにも教材研究は十分に行う(この単位に関しては他の誰にも負けない、という位に)」の2点である。

◇「スピーチ」を利用して生徒の関心と繋がる

1つ目の授業のワクに関してだが、実習生らしい切り口を加えることも重要で、生徒の興味を喚起させることにも繋がる。実際の授

業では、毎回始めに担当の生徒が数分間「自分の尊敬する人（有名人など）とその人に対してどのように感じたか」をスピーチしてもらう時間と、それに対するコメントを先生が行う時間があった。生徒がどの人を発表するかはまったくの未知であったが、その人自身のこと、生徒がどう考えたか、私自身の経験や体験で学んだこと（かつての先輩として高校時代の話やアルバイト、海外でのボランティア、震災で被災した経験等）をもとに生徒に何を伝えたいのかを関連づけてコメントするよう心掛けたら生徒の目の色が変わり、こちらに興味を持ってきている様子がうかがえた。また、学校行事など生徒にとって身近な話題を含んで授業の説明をすると、生徒の姿勢に変化が見られた。

始めのスピーチであるが、これを授業の導入として十分に活かしきれなかったことが残念である。このコメントを含むスピーチの時間は、倫理や政治経済の授業内容と全く関係がないように感じる。しかしそれでは「学びの切断」にならないだろうか。また、歴史とは違って倫理や政治経済を苦手とする生徒は多いが、私達が歩む社会や生き方と最も密接な科目である。私の経験上、「学びの連続性」のある授業の方が内容に引き込まれ、理解がしやすく、派生した他の物事にも興味を持つきっかけをつくっている。自身の経験を通して学んだことや生徒に伝えたいことといったメッセージから、「今日この単元を学ぶことは生徒にとってどのような意味を持つのか」という想いは伝えきれなかった。この流れがしっかり展開へと結びつくと、より生徒の目を惹くまとまりある授業となっただろう。

ここで必要なことは、1人の私としての自己分析と、想像力であると思う。自己分析がしっかりできていると、自分自身の思いや考えを人にしっかりと伝えることができ、魅力ある人になることができる。更にそれ以上に重要なのが想像力である。これは引き出しの

広さであり、予期せぬ発問や展開となっても想像力があればカバーできる。ゆえに想像力は豊かな教材研究で形成できるといってもいい。

◇深い教材研究で多様な対応が可能に

2つ目の教材研究であるが、内容をただ「伝える」だけでなく相手に「伝わる」モノにするために必要不可欠だということを感じた。まず自分自身が理解して、相手にとってわかりやすいものにするべく1つの事柄を多角的な側面から理解してゆく。深い理解のうえで、必要なことだけを伝えられることができ、時間などのマネジメントもできるようになるし、発問のタイミングも丁度良くなる。自分の引き出しが広く、深い理解があればクラスのタイプによって説明の内容を変えることが可能である。私は、理解の早さに差があるクラスに対して、ほとんど同じ説明の仕方しか用意ができなかった。「10知ったことを3伝える」ように、十分な時間をかけた内容を自分のモノにしていく必要がある。

授業の魅力はその多くが学生時代に培われた魅力ということも感じた。1つの専門の学問に打ち込んで研究できる時間は教員になったらそうはつukれないし、サークル活動や海外旅行など色々な物事に触れることもほとんど学生時代にしか成し得ない経験である。こうした「十分な教材研究と豊かな人間性」があつて生徒により良いものを伝えることができるだろうし、授業の自分軸も構築されるだろう。私達の生活と密接に関わる公民科はこれがより授業に反映されやすいものだ。限りある学生期間、大切にしていかなければならないと感じた。